



## 消えた街角:富岡哇草・記録の日シリーズ

# 昭和三十二年 橋上で休みなく変動する日本を想う

東京駅を出て西へ向かう電車が、最初にくぐる陸橋が札の辻橋である。品川駅まで京浜東北線、山手線、東海道線（湘南電車と長距離列車）、東海道新幹線とひっきりなしに併走するさまは壮観。しかもその合間を縫って通る観光列車、団体列車を合わせると、一日どれくらいの数の電車がくぐり抜けるのだろうか。鉄道マニアならずとも、札の辻橋に立つと心ときめく。数年前に架替工事があり四車線に拡幅。新橋へなだれ込むトラック、バス、乗用車の渋滞は、現代日本の交通事情の縮図を見る思いがする。

ところで、わたしが札の辻橋を知ったのは、昭和二十七年（一九五二）東海道線で通勤をはじめた時である。扇風機も無い木造客車の開け放しの窓からくぐり抜ける札の辻橋を見上げては、威圧と信頼を感じ、訪ねてみようとは思っていた。しかし敗戦後の惨めな時代、世の中みんなが働きづめで、途中下車して見物に行く余裕が無かった。

ようやく目的を果たしたのは五年後、別の用事で札の辻に近い三田アパートを訪ねた時である。橋は想像どおりの立派な鉄橋。それは第二次大戦の空襲でも破壊を免れた橋梁に、当時の人の情熱と真摯な努力がうかがえて感動した。

そして眼下の広大な車両基地では、何台もの蒸気機関車、ディーゼルカーを使い、手旗で合図して、貨物車、客車を組んでいる鉄道員の、こまめに動く姿が小さくとおしく眺められた。その隣、海側に接した横河橋梁の工場では、巨大な橋桁造りで溶接の火花

が飛び、鉄打ちの音がけたたましく響いていた。その向こうは都の汚水処理場で、更にはその先の工場の高い煙突からは、勢いよく煙が上がって活動ぶりを示していた。こうして見渡す埋立地工場街の周辺では埋め立て中の平坦地が横たわり東京湾に浮かぶ貨物輸送船も見通せた。

反対山側には、これから訪ねる三田アパートが古い家並みの上にひととき大きく構え、橋の袂に残る戦後バラック群とで対照的な風景を出現していた。

思えば札の辻は、今日、第一京浜国道と愛称される東海道と江戸城から延びる桜田通りとが合流する重要な地点。その江戸時代高札場の辻と、昭和に入って次第に拡大する埋立地の海岸通りを結んで先行建設された跨線橋が札の辻橋であった。

そして、この写真撮影後の日本の復興、経済急成長により輸送事情は大きく転換。東京オリンピックを好機に東海道新幹線が増設されることになり、これら海側の工場は移転を余儀なくされた。そして余地には次第に高層ビルも建ち、景観は一変した。

（昭和三十二年五月十八日 撮影）

富岡哇草（とみおか けいそう） 大正15年8月、三重県生まれ  
日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



今回の撮影場所である「札の辻橋（ふだのつじばし）」は、JR田町駅の南西に位置している。初代の橋は昭和8年の架設以来、約70年間にわたり地域の交通を支えてきたが、耐荷力、耐震性、歩道の拡幅、円滑な交通を確保するために架替工事を開始。約7年の歳月を要して平成17年に完成した。その際、親柱には地元小学生の書いた橋名が掲げられ、地域住民との深いつながりを表現している。

（平成22年7月28日撮影）